

トランポリン王国・石川

【トランポリンの歴史】

トランポリンの起源は、中世ヨーロッパで、わら人形を毛布ではね上げるスペインのペレレと呼ばれる遊びや、人間を放り上げるケット上げという悪戯遊びなどと言われている。また、サーカスの空中ブランコの安全ネットが起源ともされる。

現在のような跳躍台は1930年代、米国のジョージ・ニッセン氏が開発し「トランポリン」と名付けて販売されたのが最初である。当初は、第二次世界大戦中にパイロットの飛行訓練用として用いられ、戦後、米国から欧州、日本へと紹介された。

日本では、1956年に日本体育協会が創始者のジョージ・ニッセン氏と全米チャンピオンのフランク・ラディ氏を招待し、各地で公開演技や講習会を開催したのが始まりで、その後、日本体育大学、天理大学、早稲田大学などの大学で購入され、体操競技などの練習に用いられるようになった。1963年には日本体育協会の一般体操の一分野として採用され、オープン競技が行われ、1966年には第1回全日本学生トランポリン選手権大会が開催された。1972年には、日本トランポリン協会が日本体操協会から分離し発足している。(2013年日本体操協会に再統合) また同年の第7回世界選手権(独シュツットガルト)に初参加し、日本人選手が世界の舞台に立つようになった。

競技スポーツとしてのトランポリンが発展する一方で、激しい運動をしなくても、しっかりとした有酸素運動ができるトランポリンは、運動初心者や子ども、高齢者、女性に人気となり、スポーツジムなどを中心に幅広い世代の生涯スポーツとして普及している。

【トランポリン王国の礎】

石川がトランポリン王国として発展してきたのは、金沢学院大学名誉教授の塩野尚文氏の功績によるところが大きい。塩野氏は、1960年、天理大学の器械体操部に所属していた時にトランポリンに出会い、練習器具として使用していた。「これはいろいろな人に楽しんでもらえる」と考えた塩野氏は、大学卒業後地元石川に戻り、高校教員としてトランポリン部を創部、1974年には、石川県トランポリン協会を発足させ、「どうやってトランポリンを普及させようか?」と思案した結果、女性の運動不足解消に役立てようと「ママさん教室」を開講し、楽しみながらトランポリンに親しんでもらうことで、競技人口の裾野拡大に努めた。「ママさん教室」には、子どもたちが付いてきて、自分もやりたいという子どもが多く現れた。その子どもたちをトランポリンの選手候補にするのが、塩野氏の狙いでもあった。その後、塩野氏は、石川県体育館の職員となり、ママさんのトランポリンクラブを二つ立ち上げ、二つのクラブを競わせることで選手のレベルを上げていった。また、「ママさん教室」で指導を受けたママさんの中には指導者として県内各地で活動する人達が出てきて、トランポリン人口の拡大に繋がった。

塩野氏のもう一つの功績は、トランポリンをレクリエーション・スポーツとして楽しむ方法として「シャトルゲーム」を考案したことである。「シャトルゲーム」は、2台のトランポリンで二人の選手が交互に跳びながら、一つずつ技を増やしていくゲームで、全国スポーツレクリエーション祭の種目としても採用された。また、トランポリンを空中感覚を養う「エアリアル・トレーニング」として広めるため、バッジテストを考案し、今でも全国で実施されている。自分の上達ぶりをチェックできるバッジテストは、才能ある選手の発掘の場にもなっている。

このように、塩野氏の競技スポーツと生涯スポーツの両輪での普及活動によって石川は全国に誇るトランポリン王国となった。そして、塩野氏の考案した石川方式によって、全国に普及するとともに、世界のトップを狙えるまでに発展してきたのである。

【トランポリン王国の実力】

それでは、トランポリン王国石川の実績と現状はどうなっているのか見てみよう。

トランポリン競技の国内最高峰の大会「全日本トランポリン競技選手権大会」の成績を見ると、1980年頃からは、石川県出身または関係選手が常に好成績をあげている。

女子個人では半田玲子選手、古章子選手がそれぞれ9連覇しているほか直近10年間では石川県関係の選手が8回優勝している。男子でも福井卓也選手が5回、中田大輔選手が7連覇、伊藤正樹選手が3連覇を含め7回優勝しており、直近10年間では6回優勝している。

また、団体競技が始まった第17回大会（1979年）以降、41大会中、女子が20回、男子が17回優勝している。シンクロ競技も同様でシンクロ競技が始まって以来、石川県関係者を含むペアの優勝は、女子が40大会中33回、男子が44大会中20回となっており圧倒的な強さを誇っている。

生涯スポーツとしての普及について検証すると、日本体操協会のトランポリン競技登録指導者数は438人で全登録指導者数の15.7%、トランポリンコーチ数は93人で全コーチ数の13.4%、トランポリン普及指導員数は299人で全普及指導員数の15.6%でいずれも全国第一位となっている。県の人口が日本全体の1%に満たない石川県にこれだけの指導者がいるということからもトランポリン王国の底力が感じられる。

また、競技面で見ても、登録選手数は278人（男子100人、女子178人）で全国の9.7%、実数では熊本県に次いで全国第二位だが、人口10万人あたりで見ると24人で全国第一位（熊本県は21人）、登録審判員数は95人で全国の審判員数の12.7%で第一位となっており、選手、指導者の質・量とも全国のトップであり、実績やデータから見ても石川県がトランポリン王国であることが実証できる。（*データは日本体操協会2020.3現在）

【いしかわから世界へ】

2020年は新型コロナウイルス感染症拡大のため国際大会が軒並み中止となったが、直近の2019年、2018年の国際大会の結果を見ると、毎回日本人選手が上位に入賞している。オリンピック種目である個人競技での成績を見ると、すでに東京オリンピック出場を内定している森ひかる選手（金沢学院大学クラブ）は、2019年の世界トランポリン競技選手権大会で優勝しているほか、その他の国際大会で2位が2回（2018年第18回アジア競技大会、2019年WCハバロフスク大会）、同じく内定している男子の堺亮介選手（金沢星稜大学OB）は世界選手権5位、その他の国際大会でも4位（2018年第18回アジア競技大会）、6位（2019年WCミンスク大会）に入賞している。また、オリンピック出場が期待される女子の宇山芽紅選手（金沢学院大学OG）、佐竹玲奈選手（かほく市出身、星稜高校OG）、男子の岸大貴選手（小松市出身、金沢学院大学OB）も国際大会で上位入賞を果たしており、石川出身や縁のある選手のメダル獲得は現実味を増している。

【オリンピックのトランポリン競技】

トランポリンが五輪競技となったのは2000年のシドニー大会からだ。トランポリン競技は個人、シンクロ、団体の3種目あるがオリンピックでは個人競技だけが行われる。男女16人ずつが出場し、予選は規定の要素を含む10種類の異なる跳躍を行う第1演技と、自由演技の第2演技の合計点で競い、男女とも上位8人が決勝に進む。決勝は予選の得点を加味せず、8人が横一線で戦うこととなる。これまで日本人選手は男女とも入賞止まりでメダルの実績はない。日本のスポーツ界にとってオリンピックでの悲願の一つとしてトランポリン競技でのメダル獲得がある。これは、トランポリン王国といわれる石川にとっての悲願でもあり、東京大会での地元選手活躍への期待はますます高まっている。

これまでの最高順位：

男子4位：外村選手（北京）、伊藤選手（ロンドン）、棟朝選手（リオ）

女子6位：古選手（シドニー）

<資料>

過去のオリンピック出場選手と成績

開催年	開催都市	性別	選手名・出身等	成績
2000年	シドニー五輪	男子	中田 大輔（美川町出身）	予選敗退
		女子	古 章子（金沢市出身）	6位入賞
2004年	アテネ五輪	女子	廣田 遥	7位入賞
2008年	北京五輪	男子	外村 哲也	4位入賞
		女子	上山 容弘 廣田 遥	予選敗退 予選敗退
2012年	ロンドン五輪	男子	伊藤 正樹（金沢学院大OB） 上山 容弘	4位入賞 5位入賞
		女子	岸 彩乃（小松市出身）	予選敗退
2016年	リオ五輪	男子	棟朝 銀河 伊藤 正樹（金沢学院大OB）	4位入賞 6位入賞
		女子	中野 蘭菜（金沢市出身）	予選敗退

東京オリンピック出場内定選手・出場有力選手

2020年 (2021 年に延 期)	東京五輪	男子	堺 亮介（金沢星稜大学OB） 岸 大貴（小松市出身） 海野 大透	出場内定 有力候補 有力候補
		女子	森 ひかる（金沢学院大学クラブ） 宇山 芽紅（金沢学院大OG） 土井畑 知里 佐竹 玲奈（かほく市出身）	出場内定 有力候補 有力候補 有力候補

<参考>

全日本トランポリン競技選手権大会における石川出身または関係者の主な成績

【個人】

半田 玲子 (金沢市出身)	第 18 回大会 (1981 年) ~ 第 26 回大会 (1989 年)	9 連覇 (女子個人)
古 章子 (金沢市出身)	第 27 回大会 (1990 年) ~ 第 35 回大会 (1998 年)	9 連覇 (女子個人)
福井 卓也 (美川町出身)	第 23 回、24 回、28 回、30 回、31 回	通算 5 回優勝 (男子個人)
中田 大輔 (美川町出身)	第 32 回 (1995 年) ~ 第 38 回 (2001 年)	7 連覇 (男子個人)
伊藤 正樹 (学院大 OB)	第 45 回 (2008 年) ~ 第 47 回 (2010 年) 第 49 回、第 50 回、第 52 回、第 53 回	3 連覇を含め通算 7 回優勝 (男子個人)

その他の女子個人優勝者 (直近 10 年間)

第 48 回 (2011 年)	湊 和代 (北陸学院)
第 50 回 (2013 年)	森 ひかる (金沢学院ク)
第 51 回 (2014 年)	中野 蘭菜 (星稜ク)
第 52 回 (2015 年)	杉谷 櫻花 (星稜ク)
第 54 回 (2017 年)	岸 彩乃 (金沢学院ク)
第 55 回 (2018 年)	森 ひかる (金沢学院ク)
第 56 回 (2019 年)	高木 裕美 (金沢学院ク)
第 57 回 (2020 年)	佐竹 玲奈 (かほく市出身)

その他の男子個人優勝者 (直近 10 年間)

第 54 回 (2017 年)	岸 大貴 (金沢学院ク)
第 56 回 (2019 年)	堺 亮介 (星稜ク)

【団体】

女子 第 26 回 (1989 年) 北陸学院高校
第 32 回 (1995 年) ~ 第 57 回 (2020 年)
第 37 回、第 45 回 ~ 第 49 回、第 51 回の 7 回を除き
金沢学院大学クラブ (旧: 金沢学院北國クラブ) が優勝 (19 回)

男子 第 36 回 (1999 年) ~ 第 57 回 (2020 年)
第 40 回、第 41 回、第 46 回、第 47 回、第 57 回の 5 回を除き
金沢学院大学クラブ (旧: 金沢学院北國クラブ) が 14 回優勝
星稜クラブが 3 回優勝

【シンクロ】

女子のシンクロ競技が実施されることとなった第 18 回大会 (1981 年) 以降
石川県関係の選手を含むチームの優勝回数は
男子 20 回 / 40 回 女子 33 回 / 40 回